蓮　の　眼　(1)

――ラーマの形象表現を手がかりに――

金　沢　　篤

はじめに

本稿は、インドの古典作品の中にしばしば現れる「蓮の眼」という譬喩的表現をめぐっての文献学的研究である(1)。周知の通り、蓮はインド文化を考える上で極めて重要な植物であり、これまでにも様々な角度から、実に多様に研究が重ねられてきた(2)。本稿は、むろんそれらの成果を視野に入れつつも、表現者の個性とも言うべき、個人の眼差しに拘ってみたい。したがって、表現者個人が、「蓮の眼」という表現に託した意味の詮議に終始することになる。つまり「蓮の眼」とは、表現者にとって、いったい如何なる眼を指してのものなのか、それを問うことを目的とする。表現はあくまでも自由である、表現者は、自らの表現にどのような意味をも託し得る。だが、表現だけをあれこれ集めてそこから何か共通の意味をあげつらうことは、さほど意味があるようには思えない。かと言って個々の用例を、それがいかなる意味を持つかと頑なにあれこれ詮議しても必ずしも実りあるものにはなるまい。そこで筆者は、表現者の一つの個性に収斂し得るような一つの作品中の諸用例、しかも普遍性を勝ち獲ているような有名なキャラクターの形象表現に限定して作業を進めたい。さいわい、インド文化史上、最も有名なキャラクターの一人と言い得るラーマが、しばしば「蓮の眼」を持つ者と表現されることから、「ラーマの形象表現」の中に現れる「蓮の眼」を手がかりとして、この「蓮の眼」の問題にアプローチしてみたい。ラーマの物語は、インドの様々な古典作品の随所に取り上げられていると言い得るが、ここではヴァールミーキに帰される『ラーマーヤナ』に限定する。またそれを補足する意味で、時代的にもそうは隔たりのないだろうと考えられる『マハーバーラタ』の用例も多少は加味して検討することになる。

それにしても、「蓮の眼」とは、いったいどのような眼なのだろう。

以下に順を追ってやや組織的に検討を加えたいと思うが、それに先だって、二つの点だけを簡単に確認しておきたい。一つは「蓮」である。蓮と一口に言って

もそれが意味するところは様々である。蓮は植物の名前であるが、一つの植物も様々な部分、要素から構成されている。花、葉、茎、根などなど。また、花に限定しても、花は花弁、萼、雄蘂などなどの部分を持つ。蕾の状態もあれば、開花した状態もある。色も白、赤、青、黄と様々、見る角度によってはその形状も様々である。さらに蓮という言葉で通常は、水上に水面から離れて花や葉が存在する、いわゆる蓮（lotus）と、水面に接するようにしてある睡蓮（water-lily）に大別される。睡蓮の花は蓮の花に較べて概して小振りである(3)。葉は、葉柄に支えられて空中にある蓮に対して、切り込みのある葉が水面に浮かんでいる睡蓮では随分と印象が異なる。蓮の実や、地下茎が発達して食用にまで重宝される蓮根は蓮のものである。蓮の実を「蜂の巣」状に内包している花托は、やはり蓮のものである。日中開花するものは、太陽と深く結びつけられ、夜間開花するある種の睡蓮は、月と関連づけられる。プンダリーカは「白蓮」、白い花をつける蓮の代表的なものであり、パドマは「紅蓮」、赤い花をつける種のようである。またしばしば遭遇するウトパラやニーラ・ウトパラは、「青蓮」、青い花をつける睡蓮を指すもののようだ。その他にも、こうした蓮の仲間を指す言葉は夥しい数が知られている。しかも、古典作品上の種々の蓮が、現実に知られる蓮のどれに相当するかを特定する作業は事実上不可能と言ってよいほどである。

一方、譬喩される方の「眼」にしても、それが様々な要素から構成されていることが、例えばインドの伝統的な医学書などからも容易に知れる。頭部にある顔の中、眉毛の下方に一対を占める二つの眼は、基本的に、①瞳（dṛṣṭi）、②黒眼（kṛṣṇa）、③白眼（śveta/śukla）、④瞼（vartman）、⑤睫（pakṣman）、⑥内眦（kanīnaka）、⑦外眦（apāṅga）といった部分から構成されていると言い得る(4)。

したがって、「蓮の眼」という譬喩的表現で、それが果たしてどのような眼を相手に表現されているかを問うことも時には必要となるだろう。万事厳密に遂行するのは、当然ながらやはり困難を極めるのである。

そこで『ラーマーヤナ』の初めから、「ラーマの眼」「蓮の眼」に狙いを定めて読み進んで行くことにする。定評あるニルナヤ・サーガラ版を底本としたい。岩本裕氏による邦訳（第二篇第七十九章まで）、並びに有名なDuttによる全英訳、あるいは昔から一般に広く親しまれているGPEの全英訳を気楽に参照する為である。同一のサンスクリットの表現に対して、先学たちがどのような訳語を与えているかを詮議することから、いわば本研究は成り立っているとまで言えるよう。

以下に見るように、『ラーマーヤナ』の主人公ラーマの形象表現中、ラーマの

眼に関しては、①「蓮の眼」と「蓮の花弁（patra/palāśa/parṇa[5]）の眼」、②「大きな（viśāla）眼」と「切れ長の（āyata）眼」、そして③「赤い眼（locana）」と「赤い眦（apāṅga）」といった三つの観点を大事にしたい。本稿は、ラーマの眼に関する、その三つの形象表現の内実とそれら三表現の相互関係を明確にすることを目的としている。

Ⅰ．ラーマの「蓮の眼」～ラーマの風貌

『ラーマーヤナ』の主人公ラーマについて、その身体的形象に関しては色々取りざたされているが、今の場合、その眼についてだけ注目してみよう。つまり「ラーマは、どのような眼をしていたのか？」である。『ラーマーヤナ』の冒頭部には、その「物語の梗概」が置かれているが、その中に早速ラーマの風貌についての記述が出てくる。

（i）　vipula-aṃso mahā-bāhuḥ kambu-grīvo mahā-hanuḥ //9//
mahā-urasko mahā-iṣvāso gūḍha-jatrur ariṃdamaḥ /
ājānu-bāhuḥ suśirāḥ sulalāṭaḥ suvikramaḥ //10//
samaḥ sama-vibhakta-aṅgaḥ snigdha-varṇaḥ pratāpavān /
pīna-vakṣā viśāla-akṣo lakṣmīvāñ chubha-lakṣaṇaḥ //11//（R I-1-9cd～11）

（1）［ラーマは、］広大な肩（vipula-aṃsa）、大きな腕（mahā-bāhu）、貝殻のような頸（kambu-grīva）、大きな頬（mahā-hanu）、大きな胸（mahā-uraska）の持ち主にして、偉大な射手（mahā-iṣvāsa）、鎖骨を秘めた（gūḍha-jatru）、敵の調伏者（ariṃ-dama）である。腕は膝まで達し（ājānu-bāhu）、頭部の形よく（suśiras）、額の形よく（sulalāṭa）、足取り美しく（suvikrama）、姿勢良く（sama）、皮膚の色輝かしく（snigdha-varṇa）、光輝に溢れ（pratāpavat）、胸板厚く（pīna-vakṣas）、大きな（viśāla）眼（akṣa）をして、ハンサムであり（lakṣmīvat）、吉相を具えていた（śubha-lakṣaṇa）。

取り敢えず「大きな眼」（viśāla-akṣa）としたのがラーマの眼についての記述である。風貌的にも申し分のないラーマ王子だが、その一端を担う特質が、眼についての「大きな眼」（viśāla-akṣa）である。Dutt訳では “expansive eyes”（p.1）、GPE訳では “large eyes”（p.2）。岩本訳では「眼は大きく」（４頁）である[6]。

この冒頭の「物語の梗概」の中には、ついで、以下のような記述が出てくる。

（ii）　praviśya tu mahā-araṇyaṃ rāmo rājīva-locanaḥ /
virodhaṃ rākṣasaṃ hatvā śarabhaṅgaṃ dadarśa ha //41//（R I-1-41）

(2)　一方、蓮（rājīva）の眼（locana）を持つ、ラーマは、大きな森に入り、羅刹ヴィローダを打倒した後に、シャラバンガに見えた。

つまり、先には「大きな眼」の持ち主と紹介されたラーマ王子は、ここでは「蓮の眼」の持ち主と表現されているのである。rājīvaを取り敢えずは、「蓮」と訳したが、当然ながら、Dutt訳 “the lotus-eyed Rāma”（p.3）、GPE訳 “the lotus-eyed Rāma”（p.4）、岩本訳「蓮華のような眼をしたラーマ」（8頁）を踏まえてのものである(7)。

『ラーマーヤナ』の「物語の梗概」、すなわち第一篇「バーラ・カンダ」の第一章には、「眼」についての記述は、ただこの（i）（ii）の二例あるのみである。その二例が、共に主人公ラーマ王子の眼についてのものである。一つが「大きな眼」、もう一つが「蓮の眼」であることに注目すべきであろう。

さて、次いでは以下の用例（iii）に注目したい。

(iii)　tāsāṃ tena^atikāntena vacanena suvarcasām /
mukha-padmāny aśobhanta padmāni^iva hima-ātyaye //（R I-8-24）
(3)［ダシャラタ王の］その極めて魅惑的な言葉によって、輝かしき、その［妃］たちの、蓮の如き顔々（mukha-padma）は、寒季の終わりの、蓮（padma）のように、輝いた。

眼ではないが、眼を含む顔もまた、蓮をもって譬喩的に表現されることがある点を銘記したい。『ラーマーヤナ』の中で、次に眼が問題となるのは、子宝を欲しているダシャラタ王に招請された有名なリシュヤ＝シュリンガ仙に帯同せる王女シャーンターの眼についてである。

(iv)　antaḥpurāṇi sarvāṇi śāntāṃ dṛṣṭvā tathā-āgatām /
saha bhartrā viśāla-akṣīṃ prītya^ānandam upāgaman //30//（R I-11-30）
(4)［ダシャラタ王の］妃たちのすべては、夫［＝リシュヤ＝シュリンガ仙］と共に、そのようにやって来た、大きな（viśāla）眼（akṣa）の、シャーンターを見て、好ましく思い、歓喜［する］に至った。

ラーマの眼に関して用いられた「大きな眼」が、ここでは女性の眼に関しても用いられている。次いで現れる眼は、人間ならざるヴィシュヌ神の眼である。以下の（v）の用例である。

(v)　tataḥ padma-palāśa-akṣaḥ kṛtvā^ātmānaṃ caturvidham //31//
pitaraṃ rocayāmāsa tadā daśarathaṃ nṛpam /（R I-15-31cd～32ab）
(5)　それから、蓮（padma）の花弁（palāśa）の眼（akṣa）を持つ［ヴィシュ

ヌ神］は、自身を四分し、次いで、ダシャラタ王を［自身の］父として輝かせた。

ヴィシュヌ神は、「蓮の花弁の眼」を持つとされているのである。だが、便宜的にそのように訳しても、筆者にとって、padma-palāśa-akṣaと表現されたところのものが何であるのかわかっているわけではない。蓮（padma）と眼（akṣa）の間に挿入されているpalāśaの意味が不明である。Dutt訳では “one of eyes resembling lotus-petals”（p.37）、GPE訳では “whose eyes resemble the petals of a lotus”（p.48）、岩本訳「蓮の花びらの眼を持つ神（ヴィシュヌ）」を頼りにして、そのpalāśaを花弁と解しただけなのである。そもそも先にも見たラーマ王子の「蓮の眼」にしても、その表現によって、いったいラーマ王子のどのような眼が指示されていたのだろうか？ 「大きな、ぱっちりとした眼」を指して「（はっきりと、美しい）蓮の花のような眼」と表現していると考えてよいのだろうか？ その場合、「蓮の花の形状」のみが問題となるとして、色の方は無視してよいのだろうか？ それとも蓮padmaが直接的に指示するかの「赤い」色もやはり無視できないのだとすれば、ヴィシュヌ神の眼は赤色だと言いたいのだろうか？ その場合には、われわれが通常考える眼の白眼の部分が「赤色」だと言いたいのか？ それとも「青い眼の異人さん」という時の「虹彩の色」を指して言っているのだろうか？ こうした「蓮の眼」を巡ってはわからないところだらけなのである。インドの様々な古典にしばしば現れる「蓮の眼」に関して、個々の用例に則して少しく考察したい、と念願したのもこうした素朴な疑問に端を発しているのである(8)。同じ「蓮の眼」という表現が見られるとしても、時代と地域、また用いる人物によって、その表現にこめられた意味、それが意味するところは様々であろう、したがって決して明確な解答など得られないだろう、との予感に苛まれつつ、やや組織的に考察してみたい。つまりは、今日われわれが『ラーマーヤナ』として承知している作品に限定した上で、その初めからの種々の用例の検証を開始したのである。

こうした「譬喩」の類は、作者の個性により深く関連しているだろうと想像されるが、これまでにも見たように、「蓮の眼」は花／花弁の色は無視して、その大きな形状に沿ってのものだろうと、ひとまずは推定してみる。

（vi） abhipretam asaṃsaktam ātma-jaṃ dātum arhasi //17//
daśa-rātraṃ hi yajñasya rāmaṃ rājīva-locanam /（R I-19-17cd～18ab）
（6）［ダシャラタ王よ、汝は］ご子息の、蓮（rājīva）の眼（locana）を持

つラーマを、祭祀の他ならぬ十夜間、欲せられるままに、躊躇無く、託すべし。

(vii)　ūna-ṣoḍaśa-varṣo me rāmo rājīva-locanaḥ /
na yuddha-yogyatām asya paśyāmi saha rākṣasaiḥ //2// (R I-20-2)

(7)　わが、蓮（rājīva）の眼（locana）を持つラーマは十六才に満たない。かれが、羅刹たちとの戦闘に適合性ありと［わたしが］考えることはないのである。

(viii)　tato vāyuḥ sukha-sparśo nīrajasko vavau tadā /
viśvāmitra-gataṃ rāmaṃ dṛṣṭvā rājīva-locanam //4// (R I-22-4)

(8)　そして、蓮（rājīva）の眼（locana）を持つラーマが、ヴィシュヴァーミトラの手のうちにあるのを見るや、次いで、塵埃を欠く［／蓮を持つ］(nīrajaska)、心地よい風が、吹いた。

(ix)　padma-patra-viśāla-akṣau khaḍga-tūṇa-dhanur-dharau /
aśvināv iva rūpeṇa samupasthita-yauvanau //3// (R I-48-3)

(9)　蓮（padma）の花弁（patra）の大きな（viśāla）眼（akṣa）を持つ、剣や箙や弓を保持した［二王子、ラーマとラクシュマナ］は、青春の真っ盛りにあって、美貌に関しては、アシュヴィン双神の如くであります。

この用例（ix）に至って、われわれは、ようやく「蓮の眼」という形象表現の内実にぶち当たったような気がする。ラーマの眼は、「大きな眼」と表現され、「蓮の眼」と表現され、またヴィシュヌ神の眼が「蓮の花弁の眼」と表現された。その上で、ここではラーマの眼が「蓮の花弁の大きな眼」と表現されているのである。ここより判断するに、『ラーマーヤナ』におけるラーマの形象表現中に現れる、「大きな眼」も「蓮の眼」も、あるいは「蓮の花弁の眼」も、表現は異なるとはいえ、いずれも、ラーマの「蓮の花弁の形状を持つ大きな眼」に関して言われているのである。したがって、ラーマの眼に対して、「蓮の眼」と言われても、「蓮の花」全体を必ずしもイメージする必要はなく、「蓮の花」を構成する蓮の花の花弁をイメージすればよいことになる。表現者は、場合によって、「大きな眼」、「蓮の眼」、「蓮の花弁の眼」といった省略的表現を用いるに違いない。仮にそうだとしても、その表現でいずれもが、「蓮の［花の］花弁の形状を持つ大きな眼」をイメージしていると解すればよいことになる。

また、これまでのところ、ラーマの「蓮の眼」表現中の蓮を名指す言葉として、

rājīvaとpadmaの二つの語が用いられていた。このrājīvaとpadmaに何某か差異が込められているのだろうか？

（x）　tatra ca^ekā mahā-bhāgā bhārgavaṃ deva-varcasam //32//
vavande padma-patra-akṣī kāṅkṣantī sutam uttamam /
tam ṛṣiṃ sā^abhyupagamya kālindī ca^abhyavādayat //33//
.....
tava kukṣau mahā-bhāge suputraḥ sumahā-balaḥ //34//
mahā-vīryo mahā-tejā acirāt saṃjaniṣyati /
gareṇa sahitaḥ śrīmān mā śucaḥ kamala-īkṣaṇe //35//（R I-70-32cd～33,35）

（10）　そして、そこで、最高の息子を欲する、蓮（padma）の花弁（patra）の眼（akṣa）を持つ、一人の大いなる幸運を持つ女は、神の栄光を持つブリグの末［＝チャヴァナ仙］に挨拶した。そして、その［チャヴァナ］聖仙に、近づくと、その、カーリンディーは、［再び］挨拶をした。・・・・・そなたのお腹に、大いなる幸運を持つ女よ、大いなる勇猛心を持ち、大いなる威光を持ち、極めて大きな力を持つ、善き息子が誕生するでしょう。

（xi）　tejobhir gata-vīryatvāj jāmadagnyo jaḍīkṛtaḥ /
rāmaṃ kamala-patra-akṣaṃ mandaṃ mandam uvāca //12//（R I-76-12）

（11）［ラーマの］威光によって、勇猛心が失われたが故に、狼狽して、パラシュラーマ［＝ジャマドアグニの子孫］は、蓮（kamala）の花弁（patra）の眼（akṣa）を持つラーマに対して、とつとつと語った。

この用例（xi）では、ラーマの「蓮の眼」に対して、新たにkamalaが登場した。rājīva、padma、そしてkamalaである。

Ⅱ．ラーマの「赤い眼」

早くも、ラーマの「蓮の眼」と「大きな眼」についての、展望が開けたように思われる。そして、以下の用例（xii）から、ラーマの眼に関する新たな局面が浮かび上がる。

（xii）　uttara-uttara-yuktau ca vaktā vācaspatir yathā /
subhrūr āyata-tāmra-akṣaḥ sākṣād viṣṇur iva svayam //43//（R II-2-43）

（12）　また、［ラーマは、］論争の論理に於いては、言葉の主の如き、話者であり、よい眉（subhrū）を持ち、切れ長の（āyata）赤銅色の（tāmra）眼（akṣa）を持ち、自体ヴィシュヌ神の化身の如き者だった。

いかがであろう、この用例（xii）によって、ラーマの眼についての新たな明確な情報が二つ得られる。一つは、「大きな（viśāla）眼」に加えて「切れ長の（āyata）眼」の登場である。Dutt訳では “his eyes expansive and coppery”（p.7）、GPE訳では “large ruddy eyes”（p.203）、岩本訳では「切れ長な銅色の眼」（14頁）である。Dutt訳やGPE訳によれば、viśālaもāyataも意味に違いはないようであるが、わが国では、āyata-locanaは通常「切れ長の眼」と和訳される。また、ラーマの眼に関して、もう一つの新たな情報とは、その色が「赤銅色（tāmra）」と明示されている点である。『梵和大辞典』の「暗赤色の」に引かれるが、結局のところtāmraの意味するところは明確ではない。

また、ラーマの風貌に関する以下の用例（xiii）にも注意しておきたい。ラーマの皮膚の色、顔の色についてである。

（xiii）　rāmam indīvara-śyāmaṃ sarva-śatru-nibarhaṇam /
paśyāmo yauva-rājya-sthaṃ tava rāja-uttama^ātmajam //53//（R II-2-53）
（13）　大王様、青蓮（indīvara）の如く浅黒き（śyāma）、一切敵の殺戮者たる、あなたさまのご子息のラーマが、皇太子の座に就くのを［われわれは］見たいのです。

すなわち、ラーマの皮膚は「浅黒い」（śyāma）のであり、それがやはり青色をした蓮の一種であることが確実な「青蓮 」（indīvara）に喩えられているのである。したがって『ラーマーヤナ』の主人公として名高いラーマ王子は、「浅黒い（śyāma）顔に、蓮の［花の］花弁の形状をした、切れ長（āyata）の／大きな（viśāla）、赤銅色の（tāmra）眼（akṣa）をしている」ということになろうか。取り敢えず「浅黒い」と訳したśyāmaも実のところその意味するところは明確ではないのである(9)。

（xiv）　śva eva puṣyo bhavitā śvo^abhiṣecyas tu me sutaḥ /
rāmo rājīva-patra-akṣo yuva-rāja iti prabhuḥ //2//（R II-4-2）
（14）「正しく明日、プシュヤ宿が到来する。しかして、明日、わが息子、蓮（rājīva）の花弁（patra）の眼（akṣa）を持つラーマが、皇太子として、灌頂されるべきである。」と、王は。

（xv）　amoghaṃ bata me kṣāntaṃ puruṣe puṣkara-īkṣaṇe /
yā^iyam ikṣvāku-rāja-śrīḥ putra tvāṃ saṃśrayiṣyati //41//（R II-4-41）
（15）　おお、蓮（puṣkara）の眼（īkṣaṇa）を持つ男子［たる、そなた］への、わが忍耐は、無駄ではありませんでした。まさしくこの、イクシュヴァーク

王［家］の栄光は、息子よ、そなたに宿るのですから。

この用例（xv）で、蓮を表わす語として新たにpuṣkaraが登場していることに注意しておきたい。さらに、この機会に眼を表わす語についても確認しておくべきであろう。akṣa、locanaに加えてīkṣaṇaが用いられている。先走ってさらに追加しておくならば、netraもである。

また、ダシャラタ王の愛妃カイケーイーの眼に関しても以下のような表現が見られる。

（xvi）　tathā protsāhitā devī gatvā mantharayā saha /
krodha-agāraṃ viśāla-akṣī saubhāgya-mada-garvitā //55//（R II-9-55）
（16）［マンタラーによって］このように煽られて、大きな（viśāla）眼（akṣa）を持つ、［カイケーイー］王妃は、マンタラーと共に、怒りの部屋に赴き、幸運の美酒に酔いしれた。

すなわち、カイケーイー妃も、ラーマと同様、「大きな眼」の持ち主である。そして、次いで以下のように描かれるのである。（xvii）と（xviii）で確認するまでもなく、カイケーイー妃もラーマと全く同様に「蓮の花弁の眼」を持つとされるのである。ラーマの皮膚の色はやはり「青蓮のように浅黒い」。

（xvii）　parimṛjya ca pāṇibhyām abhisaṃtrasta-cetanaḥ /（R II-9-55）
kāmī kamala-patra-akṣīm uvāca vanitām idam //27//
（17）　そして、愛しく思う［ダシャラタ王］は、震える心で、両手で［カイケーイー妃］を愛撫し、蓮（kamala）の花弁（patra）の眼（akṣa）を持つ、愛しき［カイケーイー妃］に、次のように語った。

（xviii）　śūraś ca kṛta-vidyaś ca jita-krodhaḥ kṣamā-paraḥ /
kathaṃ kamala-patra-akṣo mayā rāmo vivāsyate //9//
katham indīvara-śyāmaṃ dīrgha-bāhuṃ mahā-balam /
abhirāmam ahaṃ sthāpayiṣyāmi daṇḍakān //10//（R II-13-9〜10）
（18）　そして勇敢で、学識を備え、怒りを制し、寛容である、蓮（kamala）の花弁（patra）の眼（akṣa）を持つ、ラーマが、どうして、余によって、追放されるであろう。青蓮（indīvara）のように浅黒き（śyāma）［顔をした］、長い腕（dīrgha-bāhu）を持ち、大いなる力（mahā-bala）を持ち、悦ばしい［ラーマ］を、どうして、余は、ダンダカ森の住者たらしめようか。

（xix）　vyajanābhyāṃ ca mukhyābhyāṃ śata-patra-nibha-īkṣanam /
candra-haṃsa-prakāśābhyāṃ vījyate na tava^ānanam //11//（R II-26-11）

(19)　蓮［＝百弁華］(śata-patra) のような (nibha) 眼 (īkṣana) を持つ、あなた［＝ラーマ］の顔 (ānana) が、月やハンサ鳥の輝きを持つ、二つの第一級の扇で扇がれている［場合では］ないですね。

この場合の蓮は「百弁花」śatapatraである。顔 (ānana) が、月 (candra) で喩えられている点にも注意しておきたい。

(xx)　saha tvayā viśāla-akṣa raṃsye parama-nandinī /
evaṃ varṣa-sahasrāṇi śataṃ vā^api tvayā saha //20// (R II-27-20)

(20)　大きい (viśāla) 眼 (akṣa) を持つ方よ、最高に悦ばしく、［わたしは］あなた［＝ラーマ］と共に、楽しむでしょう。あなたと一緒なら、百年でも千年でも、そのように［楽しむでしょう。］

(xix) (xx) は共に、シーターによるラーマの形象描写である。シーターにとってもラーマはやはり「大きい眼」(viśāla-akṣa) の持ち主であり、「百弁花＝蓮の眼」の持ち主である。

これまでにも見た、眼に関わる蓮を用いての譬喩的表現に対して、かなり本格的なものも見ておきたい。シーターは「切れ長の眼」の持ち主である。

(xxi)　tasyāḥ sphaṭika-saṃkāśaṃ vāri saṃtāpa-sambhavam /
netrābhyāṃ parisusrāva paṅkajābhyām iva^udakam //24//
tat sita-amala-candra-ābhaṃ mukham āyata-locanam /
paryaśuṣyata bāṣpeṇa jala-uddhṛtam iva^ambujam //25// (R II-30-24～25)

(21)　あたかも二つの蓮 (paṅkaja) から、水が［こぼれ落ちる］ように、かの女の両眼 (netra) から、水晶の如き、苦悩から生じた水［＝涙］が、こぼれ落ちた。<24>切れ長の (āyata) 眼 (locana) を持つ、白く (sita) 澄んだ (amala) 月 (candra) の如き、その［彼女の］顔 (mukha) は、［流された］涙によって／［炎熱による］水蒸気によって、あたかも水を抜かれた／水から引き抜かれた蓮 (ambuja) のように、干涸らびてしまった。<25>[(10)]

この用例 (xxi) に見られる譬喩の意味を明確にすることはかなり困難である。二つの蓮［の花］と二つの眼が見事に対応しているようであり、二つの蓮の花が二つの眼に喩えられているように解することも可能であるが、この場合は、むしろそう考えるべきではないように思われる。蓮の［花、ないし蓮の花の花弁、ないし蓮の葉］から、水がこぼれ落ちることと、眼から、涙がこぼれ落ちることが対比されているだけと考えるべきではないだろうか？　蓮の形状と眼の形状の相

似までもが含意されての譬喩的表現ではないように思う。これはこれまで見てきた「蓮の眼」表現にあっても、基本的に対比されているのは、＜蓮の花の花弁の形状＞と＜眼の形状＞であって、その色までの対応が意図されているわけではないこととも関連した問題である。

なお、蓮を表わす二つの原語paṅka-jaとambu-jaの前者が「泥生（花）」、後者が「水生（花）」が新たに登場していることにも注意しておきたい。

（xxii）　tataḥ kamala-patra-akṣaḥ śyāmo nirupamo mahān /
uvāca rāmas taṃ sūtaṃ pitur ākhyāhi mām iti //1//（R II-34-1）
（22）　それから、蓮（kamala）の花弁（patra）の眼（akṣa）を持つ、浅黒い（śyāma）、比類無く、偉大な、ラーマは、その従者に「父に、［そなたは］わたしのことを告げよ」と、語った。

ラーマは皮膚「浅黒く」（śyāma）、蓮の花弁のような「大きな眼」の持ち主なのである。しかも、そのラーマの眼の特質は、以下の用例で見る如く、父親ダシャラタ王のものでもあるようだ。

（xxiii）　na hi mithyā-pratijñātaṃ kariṣyati tava^anaghaḥ /
śrīmān daśaratho rājā devi rājīva-locanaḥ //31//（R II-35-31）
（23）お妃様、あなた様に対して誤って約束されたことがらを、蓮（rājīva）の眼（locana）を持つ、非のない、吉祥なるダシャラタ王が為さるだろうことは、決してあってはなりません。

以下の（xxiv）の用例は、ラーマの顔が「満月」（pūrṇa-candra）のようであり、色「浅黒く」（śyāma）、「蓮の眼」を持つことを再度われわれに知らせる。

（xxiv）　pūrṇa-candra-ānanaḥ śyāmo gūḍha-jatrur ariṃdamaḥ /
ājānu-bāhuḥ padma-akṣo rāmo lakṣmaṇa-pūrvajaḥ //29//（R II-48-29）
（24）　ラクシュマナの長兄のラーマは、満月（pūrṇa-candra）の如き顔（ānana）を持ち、浅黒く（śyāma）、鎖骨を秘めた（gūḍha-jatru）、敵の調伏者である。腕は膝まで達し、蓮（padma）の眼（akṣa）を持つ。

（xxv）　ity evaṃ māṃ mahā-bāhur bruvann eva mahā-yaśāḥ /
rāmo rājīva-patra-akṣo bhṛśam aśrūṇy avartayat //25//（R II-58-25）
（25）　・・・と、このようにわたしに対して、まさしく言いつつ、大きな腕を持ち、大きな名声を持ち、蓮（rājīva）の花弁（patra）の眼（aksa）を持つ、ラーマは、激しく、涙を流しました。

以下の（xxvi）の用例で注目すべきは、シーターの顔が、蓮［＝百弁花］に似

ていて、かつ満月のようであるとされている点である。眼だけでなく、時に顔も蓮に喩えられることがある点を忘れまい。なお、顔に喩えられる蓮の場合も、眼の場合と同様、花弁の形状をイメージすればよいのだろうか？ 顔は、一方で「満月」に喩えられているのであるから、蓮の場合も、花弁よりは、円形に収斂し得る「花全体」と考えるべきであろう。

（xxvi） sadṛśaṃ śata-patrasya pūrṇa-candra-upama-prabham /
vadanaṃ tad vadānyāyā vaidehyā na vikampate //17//（R II-60-17）
（26） 寛大なヴィデーハの姫［＝シーター］の、蓮（śata-patra）［＝百弁花］に似た（sadṛśa）、満月（pūrṇa-candra）を思わせる（upama）光（prabhā）を持つ、その、顔（vadana）は、萎れることはない。

以下の用例（xxvii）はラーマの形象表現において、きわめて重要な意味を持つものではないだろうか。ここでは、ラーマの顔が、「蓮の色」を持つとされているのである。しかもその蓮は通常「紅蓮」と訳されるpadmaである。これまで再三見たように、ラーマの皮膚の色は「青蓮のように浅黒い」と表現されてきたのである。この両者の表現に矛盾はないのであろうか？[(11)]

（xxvii） padma-varṇaṃ sukeśa-antaṃ padma-niḥśvāsam uttamam /
kadā drakṣyāmi rāmasya vadanaṃ puṣkara-īkṣaṇam //8//（R II-61-8）
（27） ラーマの、蓮（padma）の色（varṇa）を持ち、よい髻を持ち、蓮の［香る］呼吸（padma-niḥśvāsa）を持つ、最高のものである、蓮（puṣkara）の眼（īkṣaṇa）を持つ、顔（vadana）に、何時、［わたしは］見えるのであろうか？

padmaを通常「紅蓮」と訳して済まそうとする者は、この顔（vadana）に対する「蓮の色」padma-varṇaをラーマの形象表現に関する大いなる矛盾と考えざるを得ず、この「蓮の色」を、「蓮の葉の色」と解釈しているようである[(12)]。「蓮」によって、多く「蓮の花の花弁」と解するように、「蓮」によって「蓮の葉」と解する道も開かれている筈であろうから。だが、蓮の葉の色は果たしてどんな色なのか？ 緑色なら、「青蓮のような浅黒い」皮膚と矛盾しないのだろうか？

ダシャラタ王の、息子ラーマを想う最期の嘆きの中に出てくる表現はあらゆる意味で重要であろう。ここでは、共に「蓮」を用いて比喩的に表現されることのある眼と顔が、蓮との関連で明瞭に描かれるのである。

（xxviii） padma-patra-īkṣaṇaṃ subhru sudaṃṣṭraṃ cāru-nāsikam //69//
dhanyā drakṣyanti rāmasya tāra-adhipa-samaṃ mukham /

sadṛśaṃ śāradasya^indoḥ phullasya kamalasya ca //70//
sugandhi mama rāmasya dhanyā drakṣyanti ye mukham /（R II-64-69cd～71ab）

(28)　ラーマの、蓮（padma）の花弁（patra）の眼（īkṣana）を持ち、よい眉（subhrū）、よい歯並び、魅力的な鼻を持つ、星々の王［たる月］に等しい顔（mukha）に見える［ところの］者たちは、幸福である。<69cd-70ab>わがラーマの、よい香りを持つ、秋（śārada）の月（candra）や満開の（phulla）蓮（kamala）に似た（sadṛśa）顔（mukha）に見える［ところの］者たちは、幸福である。

顔と結びついて表現されている「蓮」が、「満開の」phullaという形容句と結びついていることによって、その「蓮」が、「蓮の花」の花全体を意味することが見て取れるのである。先の（xxvi）の解釈で行った推定が、この用例で立証されるようである。一方眼に準えられている「蓮」の方にはその花を構成している「花弁」（palāśa）がついている。これによって、眼は、蓮の花弁に、顔は、満開状態の蓮の花（全体）に喩えられていると理解すべきことが了解されるのである。そして、問題となるのは、やはり「色」というよりは、その「形状」のみである(13)。

続く、ダシャラタ王の崩御後のラーマの母スミトラー妃の嘆きの中には以下のように「蓮の眼」が現れる。

(xxix)　sa mām anāthāṃ vidhavāṃ na^adya jānāti dhārmikaḥ /
rāmaḥ kamala-patra-akṣo jīvan nāśam ito gataḥ //8//（R II-66-8）

(29)　蓮（kamala）の花弁（patra）の眼（akṣa）を持つ、生きてはいるが、ここから去ってしまった正義の、あのラーマは、わたしが今や寄る辺のない寡婦であることを知ることはない。

(xxx)　evaṃ pṛṣṭhas tu kaikeyyā priyaṃ pārthiva-nandanaḥ /
ācaṣṭa bharataḥ sarvaṃ mātre rājīva-locanaḥ //7//（R II-72-7）

(30)　しかるに、このようにカイケーイーによって親身に尋ねられた、蓮（rājīva）の眼（locana）を持つ王子バラタは、母親に対して、一切を語った。

用例（xxxi）には、ラーマの弟バラタが、「蓮の大きな眼」を持つ者とされるが、その蓮が、「白蓮」として知られるpuṇḍarīkaであることに注目したい。このプンダリーカ蓮は、これまでラーマの眼に関しては一切用いられなかったものである。「パドマの眼」などというラーマの眼と「プンダリーカの眼」というバラタの眼には、なにか意味の上で大きな違いがあるのだろうか？ Dutt訳は、この

プンダリーカを “expansive eyes resembling white lotuses”（p.218）と敢えて訳しているのである。「白蓮に似た大きな眼」とは、バラタのいかなる眼を指しているのだろうか？

だが程なくして以下に引かれる用例（xxxv）、（xli）、（lxxii）から、われわれは、ラーマの眼も、バラタ同様「プンダリーカのような眼」と表現されていることを知る。したがって、やはり「蓮の眼」といった際には、その蓮の花の色は考慮する必要はなく、ただその花弁の形状だけの比較に基づいた譬喩的表現であると理解すべきであろう。

（xxxi）　sukumāro mahā-sattvaḥ siṃha-skandho mahā-bhujaḥ /
puṇḍarīka-viśāla-akṣas taruṇaḥ priya-darśanaḥ //2//
pratyāśvasya muhūrtaṃ tu kālaṃ parama-durmanāḥ /
sasāda sahasā totrair hṛdi viddha iva dvipaḥ //3//（R II-87-2〜3）
（31）　獅子の肩、大きな腕を持ち、蓮（puṇḍarīka）の［ような］大きな（viśāla）眼（akṣa）を持つ、優美にして、偉大な、美しい容姿の若者［＝バラタ］は、瞬時に元気を取りもどしはしたものの、時間をかけて、極度に心悩み、あたかも数々の棍棒で一斉に心臓を刺し抜かれた象のように、崩れ落ちた。

一方、改めて（xxxii）に見る如く、青蓮のような浅黒いラーマの眼は「赤い眼」である。tāmraは、このraktaと類似の色と考えてよいようだ。

（xxxii）　katham indīvara-śyāmo rakta-akṣaḥ priya-darśanaḥ /
sukha-bhāgī na duḥkha-arhaḥ śayito bhuvi rāghavaḥ //19//（R II-88-19）
（32）　青蓮（indīvara）の［ように］浅黒く（śyāma）、赤い（rakta）眼（akṣa）を持つ、美しい容姿の、楽を享受して、苦に適さない、ラグの末裔［＝ラーマ］は、どのようにして、大地に休らうだろうか？

（xxxiii）　abravīc ca varārohāṃ candra-cāru-nibha-ānanām /
videha-rājasya sutāṃ rāmo rājīva-locanaḥ //2//（R II-95-2）
（33）　そして、蓮（rājīva）の眼（locana）を持つラーマは、美しい臀を持つ、月（candra）の［ような］魅力的な（cāru-nibha）顔（ānana）を持つ、ヴィデーハ王の息女［＝シーター］に語った。

（xxxiv）　yāvan na candra-saṃkāśaṃ tad drakṣyāmi śubha-ānanam /
bhrātuḥ padma-viśāla-akṣaṃ na me śāntir bhaviṣyati //7//
siddha-arthaḥ khalu saumitrir yaś candra-vimala-upamam /

mukhaṃ paśyati rāmasya rājīva-akṣaṃ mahā-dyuti //8//（R II-98-7～8）

(34)［わたしが、］兄［＝ラーマ］の、蓮（padma）の［ように］大きな（viśāla）眼（akṣa）[14]を持つ、月（candra）のような、あの、美しい（śubha）顔（ānana）を見ることがない限り、わたしに、平安が訪れるだろうことはありません。<7>月（candra）の澄んだ（amala）似姿たる、蓮（rājīva）の眼（akṣa）を持ち、大いなる光輝を持つ、ラーマの、顔（mukha）を、見るスミトラーの子息［＝ラクシュマナだけ］は、実に、目的を達成しているのです。<8>

(xxxv)　nirīkṣya sa muhūrtaṃ tu dadarśa bharato gurum /
uṭaje rāmam āsīnaṃ jaṭā-maṇḍala-dhāriṇam //25//
kṛṣṇa-ajina-dharaṃ taṃ tu cīra-valkala-vāsasam /
dadarśa rāmam āsīnam abhitaḥ pāvaka-upamam //26//
siṃha-skandhaṃ mahā-bāhuṃ puṇḍarīka-nibha-īkṣaṇam /
pṛthivyāḥ sāgara-antāyā bhartāraṃ dharma-cāriṇam //27//
upaviṣṭaṃ mahā-bāhuṃ brahmāṇam iva śāśvatam /
sthaṇḍile darbha-saṃstīrṇe sītayā lakṣmaṇena ca //28//（R II-99-25～28）

(35)　一方そのバラタは、瞬時に熟視して、［自身の］環状の髻を結った、師たるラーマが、草庵に坐しているのを見た。<25>しかも［バラタは、］黒い皮を帯び、樹皮製の上着を纏って、前方に、さながら炎のように、坐しているラーマを、見た。<26>獅子の肩を持ち、大きな腕をし、蓮（puṇḍarīka）のような（nibha）眼（īkṣaṇa）を持ち、法を行じる、大海に至る大地の夫たる［ラーマ］を。<27>大きな腕をし、シーターとラクシュマナを伴って、ダルバ草の敷きつめられた一角に永遠のブラフマー神のように、坐している［ラーマ］を。<28>

(xxxvi)　śrutvā pradakṣiṇaṃ kṛtvā muniṃ tam anumānya ca //22//
padma-patra-samāna-akṣaṃ padma-garbha-sama-prabham /
tataḥ sā gṛham āgamya patnī putram ajāyata //23//（R II-110-22cd～23）

(36)　聴聞し、右繞し、そして、その聖者の許を辞し、その後に、その婦人は、家に戻り、蓮（padma）の花弁（patra）に等しい（samāna）眼（akṣa）を持ち、蓮蔵（padma-garbha）［ヴィシュヌ神、ブラフマー神／蓮の内部］と等しき輝きを持つ、息子を産んだ。

(xxxvii)　tam aṅke bhrātaraṃ kṛtvā rāmo vacanam abravīt /

śyāmaṃ nalina-patra-akṣaṃ matta-haṃsa-svaraḥ svayam //15// (R II-112-15)

(37)　ラーマは、浅黒い（śyāma）、蓮（nalina）の花弁（patra）の眼（akṣa）を持つ、その弟［＝バラタ］を抱きしめて、発情期のハンサ鳥の声で、自ら［以下のような］言葉を語った。

(xxxviii)　tato^abravīt samīpasthaṃ rāmo rājīva-locanaḥ /
pṛṣṭhato^anugataṃ vīraṃ lakṣmaṇaṃ lakṣmi-vardhanam //77// (R III-11-77)

(38)　それから、蓮（rājīva）の眼（akṣa）を持つラーマは、傍にあって、背後から付き従う、勇敢な、吉祥を増大せしむる者たるラクシュマナに、言った。

(xxxix)　padma-patra-īkṣaṇaḥ śyāmaḥ śrīmān nirudaro mahān /
dharmajñaḥ satyavādī ca hrī-niṣedho jita-indriyaḥ //31//
priya-abhibhāṣī madhuro dīrgh-bāhur ariṃdamaḥ /
saṃtyajya vividhān saukhyān āryaṃ sarva-ātmanā^āśritaḥ //32// (R III-16-31～32)

(39)　［彼、バラタは、］蓮（padma）の花弁（patra）の眼（īkṣaṇa）を持ち、浅黒く（śyāma）、吉祥にして、肥満しておらず、長身で、法を知る者にして、真実を語る者であり、恥を知り、感官を制御して、快いことを語り、魅力的で、長い腕を持ち、敵の調伏者にして、種々の快楽を放棄しており、全霊をもって、聖兄に帰依しています。

Ⅲ．ラーマの「切れ長の眼」と「大きな眼」

「切れ長の眼」は、ラーマの眼の特徴でもある。また、ラーマの皮膚の色は「青蓮のように浅黒い」ということが繰り返し表現される。「蓮の花弁の大きな（viśāla）眼」と「蓮の花弁の切れ長の（āyata）眼」は、いかなる差異が込められているのだろうか？　この点も検討して見る必要があろう。この（xl）の用例を見る限り、両者には実質的に差異があるようには思われない。どちらも蓮の花弁のように「大きな」＝「切れ長の」眼と解して差し支えないように思われる。話をやや先取りして言うならば、少なくとも『ラーマーヤナ』の数ある用例の中で、その解釈に矛盾するような用例に遭遇することはないようだ[15]。

(xl)　sā tu śūrpaṇakhā nāma daśa-grīvasya rakṣasaḥ /

bhaginī rāmam āsādya dadarśa tridaśa-upamam //6//
dīpta-āsyaṃ ca mahā-bahuṃ padma-patra-āyata-īkṣaṇam /
gaja-vikrānta-gamanaṃ jaṭā-maṇḍala-dhāriṇam //7//
sukumāraṃ mahā-sattvaṃ pārthiva-vyañjana-anvitam /
rāmam indīvara-śyāmaṃ kaṃdarpa-sadṛśa-prabham //8//
babhūva^indra-upamaṃ dṛṣṭvā rākṣasī kāma-mohitā /
sumukhaṃ durmukhī rāmaṃ vṛtta-madhyaṃ mahā-udarī //9//
viśāla-akṣaṃ virūpa-akṣī sukeśāṃ tāmra-mūrdhajā /
priya-rūpaṃ virūpā sā susvaraṃ bhairava-svanā //10//
taruṇaṃ dāruṇā vṛddhā dakṣiṇaṃ vāma-bhāṣiṇī /
nyāya-vṛttaṃ sudurvṛttā priyam apriya-darśanā //11//
śarīraja-samāviṣṭā rākṣasī rāmam abravīt /（R III-17-6〜12ab）

（40） 一方、十頸の羅刹［＝ラーヴァナ］の、シュールパナカーという名前の妹が、ラーマの許に来て、神の如き［ラーマ］を、見た。<6>そして、顔を輝かせ、大きな腕を持ち、蓮（padma）の花弁（patra）の切れ長の（āyata）眼（locana）を持ち、象の雄々しい歩みを持ち、環状の弁髪を持ち、優美にして、偉大な、王の特徴を具備し、青蓮（indīvara）の［ように］浅黒く（śyāma）、カンダルパの如き輝きを持ち、インドラにも見紛うばかりのラーマを見て、［その］羅刹女は、愛欲に囚われてしまった。<9ab>よい顔（sumukha）、すっきりした腰の、大きな（viśāla）眼（akṣa）を持ち、髪の美しい、好ましい容貌の、美しい声の、若々しい、率直にして、品行方正にして、美しいラーマを、悪い顔（durmukha）、大きな腹、醜い（virūpa）眼（akṣa）をした、赤銅色の（tāmra）頭髪（mūrdhaja）の、醜い容貌、恐ろしい声の、凶暴なる老体、ねじ曲がった語り手、極悪行の、醜い容姿の彼女が。<9cd-11>愛神に憑かれて、羅刹女が、ラーマに言った。<12ab>

（xli） taruṇau rūpa-sampannau sukumārau mahā-balau /
puṇḍarīka-viśāla-akṣau cīra-kṛṣṇa-ajina-ambarau //14//
phala-mūla-aśanau dāntau tāpasau brahma-cāriṇau /
putrau daśarathasya^āstāṃ bhrātarau rāma-lakṣmaṇau //15//
gandharva-rāja-pratimau pārthiva-vyañjana-anvitau /
devau vā dānavāv etau na tarkayitum utsahe //16//（R III-19-14〜16）

（41） 若々しく、美貌を具備し、優美にして、大力ある、蓮（puṇḍarīka）

の［ように］大きな（viśāla）眼（akṣa）を持ち、樹皮や黒い皮の衣服を着け、果実や根を食物とし、自制し、苦行を積んでおり、梵行せる、ダシャラタの息子たる、ラーマとラクシュマナという二兄弟でした。その両名とも、ガンダルヴァ王に見紛うばかりにして、王の諸特徴を具足しており、神か、あるいはダーナヴァか、［わたしには］判断し得ないのです。

さらに、ラーマが「赤い眼」を持つことはこれまでにも再三確認したことである。だが、以下の用例（xlii）は、怒り（roṣa）のせいで、ラーマが「眦を赤くさせ」とある。「赤い眼」の内実を明らかにする際の貴重な用例であろう。ラーマが「赤い眼」であるのは、平常時のことなのか、異常時のことなのか？そして「眼が赤い」というのは、いったいどういうことであるのか？眼の虹彩部分が赤いのでも、いわゆる白眼の部分が赤いのでもなく、眼の端である、眦部分の赤さを指してのものと考えるべきなのだろうか？ここで、冒頭にも見た「眼の構成部位」としての眦を改めて見ておこう。「眦」とは、眼球の表に露出した面の両端部を指す言葉である。鼻側と耳側をそれぞれ内眦（kanīnaka）、外眦（apāṅga）と言うようである。この部分は通常は何色をしているのだろうか？　以下の用例（xlii）では、ラーマは怒り（roṣa）のせいで「眦を赤くさせ」とある。続く用例（xliii）では、ラーマの弟ラクシュマナがラーマ同様、「赤い（rakta）眼（akṣa）」を持つとある。この「赤い眼」というのは、「赤い眦」ということなのか？　怒っていない時のラーマの眦はいかなる色をしているのだろう？

（xlii）　jāta-svedas tato rāmo roṣa-rakta-anta-locanaḥ /
nirbibheda sahasreṇa bāṇānāṃ samare kharam //20//（R III-30-20）
（42）　それから、汗をほとばしらせた、ラーマは、怒り（roṣa）で眦を赤くさせて（rakta-anta-locana）、千本の矢によって、戦場のカラを射抜いた。
（xliii）　rāmo nāma mahā-tejāḥ śreṣṭhaḥ sarva-dhanuṣmatām /
divya-astra-guṇa-sampannaḥ paraṃ dharmaṃ gato yudhi //15//
tasya^anurūpo balavān rakta-akso dundubhi-svanaḥ /
kanīyāṃ lakṣmaṇo bhrātā rākā-śaśi-nibha-ānanaḥ //16//
（43）　ラーマとは、大いなる威光を持ち、一切の弓取りたちのうちの最高峰であり、種々の神的武器を具足し、戦場にあって、最高の［武士］道を行く者である。<15>その［ラーマ］に、似て、強力にして、赤い（rakta）眼（akṣa）を持ち、太鼓の［ような］声音を放ち、満月（rākā-śaśin）の如き（nibha）顔（ānana）をしたラクシュマナが若き弟である。

（xliv）　tato rāmaṃ yathā-nyāyam ākhyātum upacakrame /
dīrgha-bāhur viśāla-akṣaś cīra-kṛṣṇa-ajina-ambaraḥ //5//
kandarpa-sama-rūpaś ca rāmo daśaratha-ātmajaḥ /（R III-34-5〜6ab）
（44）　それから、［その羅刹女は、］適当に、説明することに着手した。「ラーマは、長い腕で、大きな（viśāla）眼（akṣa）を持ち、樹皮や黒い皮の衣服を着け、カンダルパと等しい容貌を持ち、ダシャラタ［王］の息子です。」
（xlv）　rāmasya tu viśāla-akṣī pūrṇa-indu-sadṛśa-ānanā /
dharma-patnī priyā nityaṃ bhartuḥ priya-hite ratā //15//（R III-34-15）
（45）　一方、ラーマには、大きな（viśāla）眼（akṣa）を持ち、満月（pūrṇa-indu）にも似た（sadṛśa）顔（ānana）を持つ、愛しき正妻［＝シーター］があり、常に夫の、好ましき幸福を、愛でているのです。
（xlvi）　sa tāṃ padma-palāśa-akṣīṃ pīta-kauśeya-vāsinīm /
abhyagacchata vaidehīṃ hṛṣṭa-cetā niśācaraḥ //13//（R III-46-13）
（46）　その、夜行者［＝ラーヴァナ］は、心悦んで、その、蓮（padma）の花弁（palāśa）の眼（akṣa）を持つ、黄色い絹の着衣の、ヴィデーハの娘［＝シーター］に近づいた。

以下の用例（xlvii）は、シーターの眼は「大きく、澄んでいて、赤い（rakta）眦（anta）と黒い（kṛṣṇa）瞳（tāraka）を持つ」と明記されている点で注目すべきである。続く用例（xlviii）、（xlix）のうち、前者ではシーターが怒りから「赤い（saṃrakta）眼（locana）」を持つこと、後者では、平常時「黄褐色の（hari）眦（paryanta）」を持つラーヴァナの眼が、怒りから、赤（rakta）化すると伝えている。この「赤い眼」とはいったいどのような眼を指しているのだろうか？通常「赤い眼」と言った場合、いわゆる「黒眼／虹彩」の部分が「赤い」ものをイメージする[16]。だが、ラーマの眼の場合、その「赤い眼」とは、「眦の色」ないし、通常は「白い」筈の、いわゆる「白眼」の部分の色を指してのものと考えるべきであろう。だが、実のところ、その真相は必ずしも明かではない[17]。

（xlvii）　samāḥ śikhariṇaḥ snigdhāḥ pāṇḍurā daśanās tava /
viśāle vimale netre rakta-ante kṛṣṇa-tārake //18//（R III-46-18）
（47）　あなたの［＝シーターの］歯は、等しく、山をなし、光沢あって、白い（pāṇḍura）。［あなたの］両眼（netra）は、大きく（viśāla）、澄んでいて（vimala）、赤い（rakta）眦（anta）と黒い（kṛṣṇa）瞳（tāraka）を持っ

ている[18]。

(xlviii)　evam uktā tu vaidehī kruddhā saṃrakta-locanā /
abravīt paruṣaṃ vākyaṃ rahite rākṣasa-adhipam //20//（R III-48-20）
(48)　一方、このように言われたヴィデーハの娘［＝シーター］は、怒って（kruddha）、赤い（saṃrakta）眼（locana）をして、孤軍、羅刹の王に、［以下のような］激しい言葉を言った。

(xlix)　evam uktavatas yasya rāvaṇasya śikhi-prabhe /
kruddhasya hari-paryante rakte netre babhūvatuḥ //5//（R III-49-5）
(49)　ラーヴァナが、怒って（kruddha）、このように言うや、黄褐色の眦（hari-paryanta）を持つ両の眼（netra）は、火の輝きを発して、赤く（rakta）なった。

(l)　vāmena sītāṃ padma-akṣīm mūrdhajeṣu kareṇa saḥ /
ūrvos tu dakṣiṇā^eva parijagrāha pāṇinā //17//（R III-49-17）
(50)　かの［ラーヴァナ］は、左の手で、蓮（padma）の眼（akṣa）を持つシーターの、髪を、一方他ならぬ右の手で、両腿を掴んだ。

Ⅵ．蓮の花の色

これまでの検討で、「蓮の眼」は原則として「蓮の［花の］花弁の形状をした眼」を意味してのものであるとの知見が得られたように思うが、ならば、種々の言葉で表わされる蓮の「花の色」は、問題にならないのだろうか？ラーマなどの「浅黒い」（śyāma）皮膚の色を喩えるのに、「青蓮」と訳し得るindīvaraが一度ならず用いられていたのをわれわれは知っている。以下の用例（li）は、パドマ蓮の花弁（patra）の色が、「赤銅色」（tāmra）であることを示している。

(li)　tasyāḥ parama-kalyāṇyās tāmrāṇi surabhīṇi ca /
padma-patrāṇi vaidehyā abhyakīryanta rāvaṇam //16//（R III-52-16）
(51)　その、最高の吉祥を持つ、ヴィデーハの娘［＝シーター］の、赤銅色の（tāmra）、芳香（surabhi）を持つ、蓮（padma）の花弁（patra）が、ラーヴァナに対して、散じられた。

また、先の用例（xlvii）で、シーターの眼は、「赤い（rakta）眦（anta）と黒い（kṛṣṇa）瞳（tāraka）」を持つと表現されていた。にもかかわらず、以下の用例（lii）では、シーターは「暗い／黒い（asita）外眦（apāṅga）」を持つとされている。これは矛盾ではないか？

(lii)　tatra tām asita-apāṅgīṃ śoka-moha-samanvitām //13//
nidadhe rāvaṇaḥ sītāṃ mayo māyām iva^āsurīm /（R III-54-13cd～14ab）
(52)　そこに、ラーヴァナは、暗い／黒い（asita）眦（apāṅga）を持つ、憂いと迷妄に捕らわれた、そのシーターを、幽閉した。あたかも［幻術師］マヤが、阿修羅の幻術を［隠し持つ］ように。

シーターなどの女性の眼に対しては「若鹿の眼」という表現が屡々用いられる[(19)]。

(liii)　atha vā mṛgaśāva-akṣīṃ mṛga jānāsi maithilīm /
mṛga-vipra-īkṣaṇī kāntā mṛgībhiḥ sahitā bhavet //23//（R III-60-23）
(53)　あるいはまた、鹿よ、若鹿（mṛgaśāva）の眼（akṣa）を持つ、ミティラーの乙女［＝シーター］を［あなたは］知っているのでは？　鹿（mṛga）の揺れる（vipra）眼（īkṣaṇa）を持つ、娘が、牝鹿たちと一緒にいるはずなのだが。

(liv)　kiṃ dhāvasi priye nūnaṃ dṛṣṭā^asi kamala-īkṣaṇe /
vṛkṣair ācchādya ca^ātmānaṃ kiṃ māṃ na pratibhāṣase //26//（R III-60-26）
(54)　愛しき乙女［＝シーター］よ、何故、［あなたは］走り行くのか？　蓮（kamala）の眼（īkṣaṇa）を持つ乙女よ、必ずや［あなたは］見られているのである。また、自身を、樹々で隠して、何故、わたしに答えないのか？

(lv)　mayā vihīnā vijane vane sā rakṣobhir āvṛtya vikṛṣyamāṇā /
nūnaṃ vinādaṃ kurarī^iva dīnā sā muktavaty āyata-kānta-netrā //11//（R III-63-11）
(55)　あの［シーター］が、わたしのいない時に、人気ない森の中で、羅刹達に包囲されて拉致されたのである。さぞかし、牝の鶚（ミサゴ）のように、切れ長の（āyata）愛らしい（kānta）眼（netra）を持つあの［シーター］は、哀れにも、声にならない叫びを、発したことだろう。

用例（lvi）には、シーターの眼が「蓮の花弁」、シーターの顔が「蓮」で対比的に表現されている。（xxvi）（xxviii）で見た通り、顔（ānana）の形は満開（phulla）時の蓮の花の形状、眼（netra）の形は蓮の花弁（palāśa）の形状ということであろう。

(lvi)　padma-ānanā padma-palāśa-netrā padmāni vā^anetum abhiprayātā /
tad apy ayuktaṃ na hi sā kadā cin mayā vinā gacchati paṅkajāni //14//（R

III-63-14）

（56） あるいは、蓮（padma）の花弁（palāśa）の眼（netra）を持つ、蓮（padma）の顔（ānana）をした［シーター］が、蓮（padma）を持ち来たろうとしただろうか？　それもあり得ない。なぜなら、かの女は、わたしなしに、如何なる時も蓮を［持ち来たるべく］赴くことがないからである。

（lvii） taṃ gṛdhraṃ prekṣya tāmra-akṣaṃ gatāsum acala-upamam /
rāmaḥ subahubhir duḥkhair dīnaḥ saumitrim abravīt //19//（R III-68-19）

（57） 息絶えて［不動の］山のような、赤銅色の（tāmra）眼（akṣa）をした、その禿鷲を見て、ラーマは、数多の苦悩に苛まれて、スミトラーの息子［＝ラクシュマナ］に、［以下のように］語った。

以下の用例（lviii）は、種々の「蓮」がその「花の色」と結び付けられて表現されているという点で貴重である。

パドマpadma、サウガンディカsaugandhika→赤色tāmra
クムダkumuda→白色śukla
クヴァラヤkuvalaya／アラヴィンダaravinda,ウトパラutpala→青色nīla

（lviii） padma-saugandhikais tāmrāṃ śuklāṃ kumuda-maṇḍalaiḥ /
nīlāṃ kuvalaya-udghāṭair bahu-varṇāṃ kuthām iva //20//
aravinda-utpalavatīṃ padma-saugandhika-āyutām /
puṣpita-āmra-vana-upetāṃ barhiṇa-udghuṣṭa-nāditām //21//
sa tāṃ dṛṣṭvā tataḥ pampāṃ rāmaḥ saumitriṇā saha /
vilalāpa ca tejasvī rāmo daśaratha-ātmajaḥ //22//（R III-75-20～22）

（58） 蓮（padma）やサウガンディカ（saugandhika）によっては赤銅色（tāmra）に、夜咲白蓮（kumuda）の群生（maṇḍala）によっては白色（śukla）に、夜咲青睡蓮（kuvalaya）の開花（udghāṭa）によっては青色（nīla）に、［日中の］蓮（aravinda）や青蓮（utpala）に、紅蓮（padma）やサウガンディカ（saugandhika）が混ざり合い（āyuta）、花咲ける（puṣpita）マンゴー（āmra）の森（vana）を背景に、孔雀（barhiṇa）の鳴く（udghuṣṭa）声（nādita）が加われば、染色毛布（kuthā）の如く、多彩色（bahu-varṇa）に、その、パンパー［湖］を、スミトラー［妃］の息子［＝ラクシャマナ］と一緒に、見ては、その、ダシャラタ［王］の、息子たる、威光に溢れる、愛すべきラーマは、悲歎にくれたのである。

これまでにも再三指摘した「蓮の眼」表現が、基本的には、その形状に主眼が

おかれての形象表現であることを示す解釈の妥当性を保証する用例がこの（lix）である。さらに、これと類似の表現が（lxxiv）にも見られる。眼の色に関しては「黒い／暗い（asita）」と表現されている。シーターの「黒い蓮の眼」とは、「黒い眦を持ち、蓮の花弁の形状をした眼」のことである。この用例によって、「蓮の眼」との表現が、必ずしも、その「眼の色」を考慮して用いられているわけではないことが知れるのではないか？[(20)]

（lix）　nūnaṃ na tu vasantas taṃ deśaṃ spṛśati yatra sā /
kathaṃ hy asita-padma-akṣī vartayet sā mayā vinā //48//（R IV-1-48）
（59）　一方、春がその地に訪れることがないならば、黒い（asita）蓮（padma）の眼（akṣa）を持つ、他ならぬかの［シーター］は、わたしなしに、どうして生き得ようか？

（lx）　śyāmā padma-palāśa-akṣī mṛdu-bhāṣā ca me priyā /
nūnaṃ vasantam āsādya parityakṣyati jīvitam //50//（R IV-1-50）
（60）　浅黒く（śyāma）、蓮（padma）の花弁（palāśa）の眼（akṣa）を持ち、しかも柔らかく語る、わが愛しの［シーター］は、春に遭遇するや直ちに生命を捨てるであろう。

（lxi）　eṣā prasanna-salilā padma-nīla-utpala-āyutā /
haṃsa-kāraṇḍava-ākīrṇā pampā saugandhika-āyutā //63//
jale taruṇa-sūrya-ābhaiḥ ṣaṭ-pada-āhata-kesaraiḥ /
paṅkajaiḥ śobhate pampā samantād abhisaṃvṛtā //64//
cakravāka-yutā nityaṃ citra-prastha-vana-antarā /
mātaṅga-mṛga-yūthaiś ca śobhate salila-arthibhiḥ //65//（R IV-1-63～65）
（61）　そのパンパー［湖］は、浄明なる水をたたえ、蓮（padma）や青睡蓮（nīla-utpala）が生え、ハンサ鳥やカーランダヴァ鳥が群れ集い、サウガンディカ（saugandhika）が生えている。<63>［その］パンパー［湖］は、水面、若やいだ太陽の輝きを孕む、蜂によって損なわれた雄蘂（kesara）を持つ、数多の蓮（paṅkaja）によって、全面的に覆われて、輝いている。<64>［さらに、パンパー湖は、］常に、チャクラヴァーカ鳥がいて、多彩で平板な内森を持ち、水を求める、象や鹿の群れを伴って、輝いている。<65>

（lxii）　padma-patra-viśāla-akṣīṃ satataṃ priya-paṅkajām /
apaśyato me vaidehiṃ jīvitaṃ na^abhirocate //67//（R IV-1-67）
（62）　蓮（padma）の花弁（patra）の［ような］大きな（viśāla）眼（akṣa）

を持つ、常に、蓮を愛でる、ヴィデーハの姫［＝シーター］を、見ること適わぬわたしには、生命は輝かないのである。

(lxiii)　padma-kośa-palāśāni draṣṭuṃ dṛṣṭir hi manyate /
sītāyā netra-kośābhyāṃ sadṛśāni^iti lakṣmaṇa //71//
padma-kesara-saṃsṛṣṭo vṛkṣa-antara-vinismṛtaḥ /
niḥśvāsa iva sītāyā vāti vāyur manoharaḥ //72//（R IV-1-71～72）

(63)　［わが］眼差し（dṛṣṭi）は、蓮蕾（padma-kośa）の花弁（palāśa）を見んとしているようである。［それらは］シーターの両眼（netra）の瞼（kośa）に似ているのであるから、ラクシュマナよ。<71>蓮（padma）の雄蘂（kesara）と合わさって、別の樹木から流れ出た魅惑的な風が、シーターの吐息のように、吹くのである。

(lxiv)　dīpayanti^iva me kāmaṃ vividhā muditā dvijāḥ /
śyāmāṃ candra-mukhīṃ smṛtvā priyāṃ padma-nibha-īkṣaṇām //100//（R IV-1-100）

(64)　種々の陽気な鳥たちは、浅黒い（śyāma）、蓮（padma）のような（nibha）眼（īkṣaṇa）を持つ、愛人［＝シーター］を、召喚して、わが愛欲を燃え立たせるかのようである。

(lxv)　padma-patra-īkṣaṇau vīrau jaṭā-maṇḍala-dhāriṇau /
anyonya-sadṛśau vīrau deva-lokād iha^āgatau //12//（R IV-3-12）

(65)　蓮（padma）の花弁（patra）の眼（īkṣaṇa）を持つ、環状の髻を結った、勇敢なる［ラーマとラクシュマナの両名］は、互いに似ており、神の世界から、この世にやって来た、勇者でしょうか。

(lxvi)　atha padma-palāśa-akṣīṃ maithilīm anucintayan /
uvāca lakṣmaṇaṃ rāmo mukhena pariśuṣyatā //21//（R IV-30-21）

(66)　そして、蓮（padma）の花弁（palāśa）の眼（akṣa）を持つ、ミティラーの姫［＝シーター］を思い浮かべつつ、疲弊した顔つき（mukha）で、ラーマは、ラクシュマナに対して言った。

シーターの眦は平常時には「黒い／暗い」。だが、以下の用例（lxvii）は、先に見た（xlvii）の用例と矛盾するようである。シーターは、「赤い眦（anta）と黒い瞳（tāraka）の持ち主」との表現が見られた。囚われの身であるシーターが泣きはらし、あるいは、怒りから、いわば異常時における「赤い眦」をしていると解すれば問題ないのかも知れない。ここでは、シーターが「黒い眦」の持ち主

であると表現されているのである。どう解すればいいのだろうか？また、次の（lxviii）の用例は頻出する「切れ長の眼」に対して「切れ長の眦」という表現のあることを示すものである。

（lxvii） sa tām asita-keśa-antāṃ suśroṇīṃ saṃhata-stanīm /
didṛkṣur asita-apāṅgīm upāvartata rāvaṇaḥ //（R V-18-32）
（67） そのラーヴァナは、黒い髪（asita-keśānta）の、美しい臀をした、堅固な胸を持ち、暗い／黒い（asita）眦（apāṅga）の、その［シーター］を見んとして、近づいた。

（lxviii） yasya sūryo na tapati bhīto yasya ca mārutaḥ /
na vāti sma^āyata-apāṅge kiṃ tvaṃ tasya na tiṣṭhasi //（R V-23-16）
（68） 切れ長の眦（āyata-apāṅga）を持つ［女＝シーター］よ、太陽は恐れて照射せず、風は吹くことをしない、かの［ラーヴァナ］に対して、どうして、あなたは対面しないのでしょうか？

（lxix） ācakṣva no viśāla-akṣi mā bhūt te subhage bhayam /
saṃvādam asita-apāṅge tvayā kiṃ kṛtavān ayam //7//（R V-42-7）
（69） 大きな眼（viśāla-akṣī）の［女＝シーター］よ、われわれに語るべし。幸運なる［女］よ、あなたに、恐れは無用なり。暗い（asita）眦（apāṅga）を持つ［女＝シーター］よ、どうして、かの者［＝ラーヴァナ］が、あなたとの口論を為すであろうか。

（lxx） tasya tat śuśubhe tāmraṃ śareṇa^abhihataṃ mukham /
śaradi^iva^ambujaṃ phullaṃ viddhaṃ bhāskara-raśminā //8//（R V-44-8）
（70） そ［のハヌマット］の、その赤銅色の（tāmra）顔（mukha）は、矢によって射抜かれて、輝いた。ちょうど、秋の、開花した（phulla）蓮（ambuja）が、太陽の光に照射されて［輝く］ように。

（lxxi） rakta-mālya-ambara-dharaḥ padma-nibha-īkṣaṇaḥ /
sarva-puṣpa-mayīṃ divyāṃ śirasā dhārayan srajam //19//（R VI-22-19）
（71） ［かれは、］赤い（rakta）[21] 花環と衣服を着け、蓮（padma）のような（nibha）眼（īkṣaṇa）を持ち、頭上には、一切の花から出来ている、神的な花冠を被っていた。

（lxxii） tau dṛṣṭvā bhrātarau tatra pravīrau puruṣarṣabhau /
śayānau puṇḍarīka-akṣau kumārav iva pāvakī //20//
śara-talpa-gatau vīrau tathābhūtau nararṣabhau /

duḥkha-ārtā karuṇaṃ sītā subhṛśaṃ vilalāpa ha //21//（R VI-47-20〜21）

(72)　そこにあって、クマーラの如き、蓮（puṇḍarīka）の眼（akṣa）を持つ、その二人［＝ラーマとラクシュマナ］の、横たわる、勇猛な人牛、矢のような座処にあって、勇敢な、文字通りの、人牛を、見て、火のような、苦に悩める、シーターは、惻隠の情に駆られて、激しく、泣いたのである。

（lxxiii）　puṣkara-akṣa mahā-bāho mahā-vakṣaḥ paraṃtapa /
diṣṭyā kṛtam idaṃ karma tvayā dharma-bhṛtāṃ vara //2//（R VI-119-2）

(73)　蓮（puṣkara）の眼（akṣa）を持つ者［＝ラーマ］よ、大いなる腕を持つ者よ、大いなる胸を持つ者よ、敵を悩ます者よ、そなたによって、幸運にも、この業績が為された、ダルマを保持する者たちのうちの最高なる者よ。

この用例（lxxiv）も、「蓮の眼」が、色に主眼がおかれての表現ではないことを示す貴重な用例である。敢えて色を「赤い」と言う際には、「赤い」、「蓮の眼」とある。つまり、「赤い」、「蓮の［花の］花弁の形状を持つ眼」という意味である。

（lxxiv）　deva-devaṃ bruvāṇaṃ taṃ rakta-amburuha-locanam /
śaktyā bibheda saṃkruddho rākṣasa-indro bhuja-antare //9//（R VII-8-9）

(74)　語りつつある、その、赤い（rakta）蓮（amburuha）の眼（locana）を持つ、神中の神に対して、怒れる、羅刹の王［＝ラーヴァナ］は、槍で、腕間部［＝胸］を、刺した。

（lxxv）　sa tāṃ padma-palāśa-akṣīm pūrṇa-candra-nibha-ānanāṃ /
varuṇo varayamāsa maithunāya^apsaro-varām //15//（R VII-56-15）

(75)　そのヴァルナ神は、夫婦になるべく、蓮（padma）の花弁（palāśa）の眼（akṣa）の、満月（pūrṇa-candra）のような（nibha）顔（ānana）を持つ、その勝れたアプサラスを選んだ。

むすびにかえて

以上駆け足ではあるが、『ラーマーヤナ』に見られる「ラーマ王子」の形象表現のうち「ラーマの眼」に関わる用例に注目して、「蓮の眼」の内実を検討してきた。細部に関しては、さらなる検討が必要と思われるが、本稿で確認できた点を簡単にまとめてみたい。「蓮の眼」とは「蓮の花弁の眼」であり、「蓮の花弁の形状をした」「大きな／切れ長の眼」を意味してのものである。主人公のラーマ王子固有の特徴というよりは、美しいと見なされる人物形象のほとんどに適用さ

れる表現であることがわかる。また、「ラーマの眼」の特徴として「赤い眼」との表現があるが、これは基本的にはラーマの「眦の赤さ」を指しての表現と考えるべきである。この眦は、いわば眼を構成する重要な部分、いわゆる「白眼」に連接するもので、怒りや悲しみなどを原因とする充血現象と基本的に区別がつかないものである。平常時眦が比較的穏やかな色合いの形象も、怒りや悲しみなどから充血して赤化すると表現されることがある。また、「大きい」と「切れ長の」という二種類の表現が頻出するが、その差異は『ラーマーヤナ』では明確にならない。さらに、譬喩的表現に多用される「蓮」に関しては、いわゆる「蓮」を表わす同義語が多数用いられているが、現実の植物との同定は困難を極めると思われる。ただし、花の色の区別、蓮と睡蓮の区別、日中開花するものと夜に開花するものの区別があるようだが、明確に分類出来るところまでは行かないようである。また、サンスクリット語で各種色を表わす語も多数知られているが、基準となるものが必ずしも明確ではなく、表現者の裁量に委ねられている場合が多いのではと愚考する。また、テキストそのものも、この手の論及に相応しい充分に批判を経た段階にあるとは到底考えられないし、したがって、本稿がそうした限界を承知の上での単に一つの試行錯誤に過ぎないという点を附記しておきたい[22]。

【『ラーマーヤナ』「蓮の眼」関連語[23]】

āyata-apāṅga;āyata-kānta-netra;āyata-locana;āyata-tāmra-akṣa;alāta-sadṛśa-īkṣaṇa;ambuja-patra-akṣa;amburuha-īkṣaṇa;asita-apāṅga;asita-padma-akṣa;dīpta-nayana;hari-paryanta;kṛṣṇa-tāraka;kamala-īkṣaṇa;kamala-patra-akṣa;kopa-saṃrakta-locana;krodha-rakta-īkṣaṇa;krodha-tāmra-akṣa;mṛga-vipra-īkṣaṇa;mṛgaśāva-akṣa;mahā-netra;nalina-patra-akṣa;pṛthu-locana;padma-akṣa;padma-dala-īkṣaṇa;padma-nibha-īkṣaṇa;padma-palāśa-akṣa;padma-palāśa-netra;padma-patra-āyata-locana;padma-patra-īkṣaṇa;padma-patra-akṣa;padma-patra-samāna-akṣa;padma-patra-viśāla-akṣa;padma-viśāla-akṣa;phulla-utpala-śubha-īkṣaṇa;puṇḍarīka-akṣa;puṇḍarīka-nibha-īkṣaṇa;puṇḍarīka-viśāla-akṣa;puṣkara-īkṣaṇa;puṣkara-akṣa;rājīva-akṣa;rājīva-locana;rājīva-patra-akṣa;rakta-akṣa;rakta-amburuha-locana;rakta-anta;rakta-locana;roṣa-rakta-anta-locana;saṃrakta-locana;tāmra-akṣa;vṛtta-piṅgala-netra;viśāla-akṣa;śatapatra-nibha-īkṣaṇa

【略号・テキスト・参考文献】

Mbh:Mahābhārata（PoonaCriticalEd.:text only）5 vols

R:Rāmāyaṇa（NirṇayaSEd.:［1983r］),2 vols

R［C］:Rāmāyaṇa（BarodaCriticalEd.:text only）

RR:Rāma's Comm. ad R →R

Basu, Santona

［2002］:*The Lotus Symbol in Indian Literature and Art*, Delhi.

Buitenen, J. A. B. van

［1978-1983r］:*The Mahābhārata*, 3 vols, Chicago.

Brockington, J. L.

［1984］:*Righteous Rāma: The Evolution of an Epic*, Delhi, etc.

Dutt, Manmatha Nath

［1998r］:*Ramayana*, 4vols, Parimal Publications:Delhi.

Eliade, Mircea

［1987］:*The Encyclopedia of Religion*, Vol. 9, NewYork &London.

GītaPress（GPE）

［2001］:*Śrīmad Vālmīki-Rāmāyana with Sanskrit Text and English Translation*, 2 vols, Gorakhpur.

Gonda, Jan

［1949］:*Remarks on Similes in Sanskrit Literature*, Leiden.

Ingalls, Daniel H. H.

［1962］:"Words for Beauty in Classical Sanskrit Poetry", *Indological Studies in Honor of W. Norman Brown*, New Haven.

［1965］:*An Anthology of Sanskrit Court Poetry*, Cambridge, Mass.

Kosambi, D. D. & Gokhale, V. V.

［1957］:*The Subhāṣitaratnakoṣa*, Cambridge, Mass.

Kulshreshtha, Sushma

［2003］: "Sixty-Four Lotus Blossoms in Kālidāsa", *Flora & Plant Kingdom in Sanskrit Literature*, Delhi.

Majumdar, Girija Prasanna

［1927］:*Vanaspati: Plants and Plant-life as in Indian Treatises and Traditions*, Calcutta.

Onians, Isabelle

［2005］:*What Ten Young Men Did*, by Dandin, New York.

Pathak, Madhusudan Madhavlal

［1968］:*Similes in the Rāmāyana*, Baroda.

Rau, Wilhelm

［1954］:"Lotusblumen"*Asiatica : Festschrift Friedrich Weller*, Leipzig.

Scharf, Peter

［2003］:*Rāmopākhyāna —— the Story of Rāma in the Mahābhārata*, London, etc.

Schmidt, Richard

［1913］: "Beiträge zur Flora Sanscritica : III. Der Lotus in der Sanskrit-Literatur", *ZDMG*, Vol. 67, pp. 462-70.

Singh, Madanjeet

［1954?］:*India : Paintings from Ajanta Caves*, New York.

Tagore, Abanindranaths

［1914?/1961］:*Some Notes on Indian Artistic Anatomy*, Calcutta. →
Abanindranath Tagor Golden Jubilee Number（Calcutta, 1961）, pp. 29-39.

Viennot, Odette

［1954］:*Le Culte de l' Arbre dans L' Inde Ancienne*, Paris.

安藤佳香

［1997］:「インドグプタ期の蓮華系植物表現について―アジャンタ石窟を中心に―」『仏教大学仏教学会紀要』第５号

岩本裕

［1980-85］: 訳『ラーマーヤナ』１～２巻 平凡社

金沢篤

［1987］:「空華：ティミラ眼病（眼翳）との関わりで」『仏教学』第23号

上村勝彦

［2002］: 訳『マハーバーラタ』１～７巻 筑摩書房

木村秀雄

［1965］: 著訳『カーリダーサ文学集　季節集・雲の使者』百華苑

阪本祐二

［1977］: 著『蓮』法政大学出版局

松山俊太郎

［1972］:「ハスと仏教」『花蓮』講談社

［1975-76］:「法華経と蓮」①～㉑（連載21回）『第三文明』
［1980-］:「古代インド人のよそおい」①～（連載継続中）『化粧文化』第三号～
［1992］:著『インドのエロス―詩の語る愛欲の世界―』白順社
田中於菟彌
［1976］:「古代文学に現れた女性」『サリーの女』評論社
田中於菟彌・指田清剛
［1966］:訳『十王子物語』平凡社

【註記】

(1)　例えばRāmāyaṇaに於ける譬喩に関する総括的研究にはPathak［1968］など多数あるが、例えば同書の"There he describes the face of Rāma as having eyes resembling the lotus in beauty and that is quite obvious, as this sort of comparison of the eyes with the lotus has been an age long convention in the literature"（p.37）といった記述などが印象に残る。それらに関しても詳細に論じる用意をしたが、諸般の制約から、大幅に割愛せざるを得なかった。註記も最小限のものに留める他なかった。蓮の問題に関しては、改めて稿を起こしたい。

(2)　蓮の持つ文化史的宗教史的意義に関しては、例えばEliade［1987］のLotusの項目など参照のこと。インドの古典作品に於ける「蓮」の象徴的意義に関する総括的研究には、Basu［2002］がある。

(3)　本文中で検討したように、筆者はRāmāyaṇaにあっては、「蓮の眼」は、原則としていずれも「蓮の花弁の形状」とのからみで処理し得るものと考える。したがって、現実の植物としての蓮も睡蓮に同定する作業にはほとんど立ち入る必要を認めなかった。だが、後代の文学作品などでは、顔を蓮の花に、眼を睡蓮の花に準えることが盛んに行われたという事実は忘れるべきではない。例えば、Kosambi&Gokhale［1957］所収の"na nīla-abjaṃ cakṣuḥ sasiruham etan na vadanaṃ"（409:p.75）「青睡蓮ではなく、眼なり、蓮華ではなく、顔なり」などにその典型を見ることが出来る。

(4)　Suśrutasaṃhitāにおける眼を構成する部分などに関しては、金沢［1987］32-35頁を参照のこと。

(5)　本文中でも触れられるが、「花弁」を意味するこれらの語が同時に「葉」をも意味する語であることが、譬喩的表現の解釈を複雑にしている。palāśaなどは、花弁、葉の他に、植物名でもあることから、翻訳者たちに余計な混乱を引き起こす結果となっている。

(6)　viśāla-akṣo visṛta-āyata-netraḥ（RR I-1-11）「大きな眼を持つ者」というのは、拡げら

れた（visṛta）、切れ長の（āyata）眼（netra）を持つ者、［という意味］である。また、文字通り「大きな眼」（mahā-netra）の用例もある。

tasya^agni-dīpta-sadṛśe vidyut-sadṛśa-varcasī /

dadṛśāte mahā-netre dīptāv iva mahā-grahau //61//（R VI-60-61）

(7)　rājīvaṃ padmam（RR I-1-41）「蓮（rājīva）」とは、蓮（padma）のことである。

(8)　筆者の本稿での作業は、例えば松山[1975-76]②に見られる、『妙法蓮華経』の「目如青蓮」に対して松山俊太郎氏が示された興味深い知見に支えられてある。氏への感謝の意味も込めて、やや長文ではあるが、引用させていただく。「これも謡曲などにもよく使われる、ありふれた比喩ですが、梵語の原文には特色があります。すなわち「ニーロートパラ・パドマ・ネートレーナヴァダネーナ」とあり、直訳すれば、「青睡蓮と紅蓮の目をもつ顔によって」となります。「青蓮の目」でも「蓮華（パドマ）の目」でもよいのですが、二種の蓮類の一つは余計に感じられます。妙法華は「目如広大青蓮華葉」と訳してありますから、「パドマ」を「パトラ」とする原本に羅什は依ったようです。こう変えて読むと、「青睡蓮のはなびらの（ような）目」と色と形が現され、すっきりします。しかし原文に忠実であろうとすれば、「青睡蓮」は瞳の色、「紅蓮」は目全体の形と大きさと、分けて考えなければなりません。また、白目と黒目が、はっきり区別されることも云っているのでしょう。「パドマの目」は、必ずしも色と関係がなく、ただ「大きな美しい目」のことですが、時には特に「充血した目」を意味することもあるので、何となくいやなのです。（岩本裕博士は、「青蓮に似た目」と訳しておられますから、「パドマ」を無視されたのでしょう。）」（92-94頁）

(9)　上村勝彦氏は、例えばMahābhāratasyāmaを「色浅黒く」と訳した上で、割注を付して「美しい色とされる」としている（上村[2002] i 54頁）。

(10)　岩本訳「彼女の心の悶えから生まれた涙は、水晶のように清らかで、両眼から流れる涙はあたかも二つの蓮華からこぼれ落ちる水さながらであった。でも、すぐに、青白く曇りなく光る月にも似た、切れ長な彼女の顔は、水から伸び出た蓮華の芽が暑さのために干乾びるように、悲しみの激しさのあまりに引きつったようであった。」（ii 121頁）は理解不能である。

(11)　あるキャラクターの形象表現中に出来する矛盾を如何に回避するかで、今日のわれわれ読者は四苦八苦する。例えば、松山[1980-]には、以下のような興味深いフレーズがある。

「・・・『ラーマーヤナ』でのシーターと並んで、インドの伝説的美女の代表とされる、『マハーバーラタ』でのドラウパディー（主人公パーンドゥ兄弟の共通の妻）の身体的特

徴を箇条書きにして、具体的な理想像をお目にかけよう―

(1)　［背丈は、］低すぎず、高すぎない。

(2)　［肌の色は、］黒すぎず、赤すぎない。

(3)　情熱的な（sarāga）赤い眼［じり］①をもっている。

(4)　秋の青睡蓮（ウトパラ）のような眼②をもっている。

(5)　秋の青睡蓮（ウトパラ）のような体臭を放つ。

(6)　秋の青睡蓮（ウトパラ）の仕える容色によって、美の女神（シュリー）にひとしい。

(7)　蓮華（パドマ）の顔が輝やくが、汗を浮かべれば、茉莉花（マツリカー）［のたくさんの蕾］のように［白く］なる。

(8)　［中央部の細い］聖火所（ヴェーディー）のような、［くびれた］腰をしている。

(9)　長い髪の毛をもっている。

(10)　銅色の唇をしている③［異文により、'tāmrākṣī'（銅色の眼）を 'tamroṣṭhī' と改めて訳す］。

(11)　毛深すぎない。

『マハーバーラタ（批評版・二・五八・三二～三六）』の抜萃意訳

(3)(4) で眼のことを言っているので、(10) は＜唇＞のこととするのが正しいと思うが、それにしても、素っ気ない叙述である。」（㉝<1996.12>80頁）

これは、Mahābhārata中のサンスクリット文の記述を踏まえて、ドラウパディーの容姿に関して総括的に論じたものである。蓮の権威、松山氏らしい細やかな配慮が窺われるが、その最たるものは、(10) に見られるテキストの読み替えである。この短い一段の中に、「赤い眼」と訳し得る記述が二度までも出てくることになる読みを不自然と考えて、二つのうちの後者を、「赤い唇」と読み替えているのである。さらに、松山氏は、②の「秋の青睡蓮（ウトパラ）のような眼」と①の「赤い眼」のバッティングを好ましく思わずに、敢えて「赤い眼（じり）」と読んだのかも知れない。こうして出来た松山氏の①②③によって、ドラウパディーの眼に関しては、「眦は赤い」ものの、「眼は青睡蓮のように」「青い眼」という整合的な像を得られたかのようである。

(12)　サンスクリット註には"padma-varṇaṃ padma-dala-varṇam"（RR II-61-8:p.247）とある。Dutt訳、GPE訳は、そのdalaを「葉」と解釈しているようだ。

(13)　蓮の眼が、単なる「花弁の眼」ではなく「蓮の花全体」を考慮しての貴重な用例！utpalaが、蓮ではなく「睡蓮」であることと関連している。

phulla-utpala-śubha-īkṣaṇām（R VII-31-23）

満開の（phulla）蓮（utpala）のように美しい／白い（śubha）眼（īkṣaṇa）を持つ

Dutt訳　full-blown lotuses for white eyes（p.102）

GPE訳　full-blown for its charming eyes（p.785）

（14）　R[C]ではpadma-palāśa-akṣam（R[C] II-92-5）とある。Pollock訳は"his lotus-petal eyes"（p.497）。例えばMahābhārata中の用例（Mbh III-65-11）に対して、上村訳は「美しい蓮華やパラーシャのような眼」(iii 184頁）としている。palāśaを植物名と解している。

（15）　だが、例えばMahābhāratāになると、そうは簡単に行かない。詳細は別稿に譲るが、

ko nu svapnas tayā dṛṣṭo yā tvām āditya-varcasam /

divya-varma-samāyuktaṃ divya-kuṇḍala-bhūṣitam //18//

padma-āyata-viśāla-akṣaṃ padma-tāmra-tala-ujjvalam /

sulalāṭaṃ sukeśa-antaṃ putratve kalpayiṣyati //19//（Mbh III-292-18～19）

「太陽の光輝を持ち、神的な鎧を帯び、神的な耳輪で飾り、蓮（padma）のような切れ長（āyata）で大きい（viśāla）眼（akṣa）を持ち、紅蓮（padma）のように赤銅色の（tāmra）掌（tala）で燃え立つ（ujjvala）、美しい額と、美しい髪房を持つ、あなたを息子と考えるだろうその女性によって、いかなる夢が見られるのか？」（拙訳）

Buitenen:What dream will she have, the woman who will adopt you who are as lustrous as the sun, wearing armor, adorned with divine earrings, with long and wide lotus-like eyes, with copper-red handpalms like red lotuses, and fine brow and handsome locks?"（p.791）

Dutt:What a dream she has dreaned who will adopt for her son you who are resplendent as the sun, clad in celestials armour, adorned with celestials ear-rings, endued with broad and expansive eyes like lotuses, possessed of a complexion bright as the copper-coloured lotus-leaves, graced with a beautiful forehead and beautiful hair.（p.854）

上村訳「彼女はどんな夢を見るでしょう。神聖な鎧を着て神聖な耳環で飾られた、太陽のように輝き、蓮のような切れ長の眼をし、紅蓮のような赤い手で輝き、美しい額で、美しい髪のあなたを、息子と見なす女は。」（上村[2002] iv 404頁）

Buitenenは、āyataとviśālaをlongとwideで訳し分けている。つまり、横長の（āyata:long）眼とぱっちりとした大きく開いた（viśāla:wide）眼のように。上村訳は、その差異を考慮していない。

（16）　なお、この問題に関しては、Ingalls[1965] が以下のように記している点は重要であろう。

"In this connecton it may be worth informing the stranger to Sanskrit poetry that by

the color of the eye the Sanskrit poet refers to the pupil or sometimes to the white and pupil, never as we do to the iris." (p.164)「これとの関連では、サンスクリット詩に不慣れな者に、眼の色によって、サンスクリット詩人が、瞳を、時に白眼と瞳を指しているのであって、われわれが虹彩[いわゆる黒眼]を指すようには決してしないということを、伝えておくことは意味ないことではないであろう。」ただし、Ingallsが何を根拠としてこう言っているのかは不明である。すなわち「赤い眼」という表現は、われわれが通常「黒眼」と呼ぶところの部分が「赤い」ということを意味しているのではなく、瞳孔の部分、ないし白眼の部分が赤いということを意味していると言おうとしているようである。だが、このIngallsの指摘はまだ十分ではない。本文に於ける種々用例でも確認出来るように、いわゆる「眼」を構成している部分は、白眼と黒眼と瞳だけではなく、眦（内眦と外眦）、瞼、睫までもが包摂されるのだという点である。

(17)　Mahābhāratの「ラーマ物語」でも、ラーマの眼に関して、「赤い眼」"lohita-akṣa"（Mbh III-261-9）や「赤い眦の眼」"rakta-anta-locana"（Mbh III-275-37）といった表現が見られる。ラーマの「赤い眼」は、この「眦」の赤さを含意してのものと考えるべきであろう。怒った折りには、この眦の赤さが、白眼の部分にまで拡大するほどに激化すると考えればよいと思われる。

(18)　平等[1937] 97-98頁参照。

(19)　このシーターの眼の特徴としてある「若鹿の眼」というのは、どのような眼なのだろうか。Mahābhāratの「ラーマ物語」にも、同じように、シーターの眼を表すものとして、その表現が用いられている。

iti sā mṛgaśāva-akṣī tac chrutvā trijaṭā-vacaḥ /
babhūva^āśāvatī bālā punar bhartṛ-samāgame //72//（Mbh III-264-72）

「といったその、トリジャターの言葉を、聞いて、若鹿（mṛgaśāva）の眼（akṣa）を持つ、その娘[＝シーター]は、再度、夫との出逢いに対して、希望を持つようになった。」（拙訳）

(20)　bhaktā nārāyaṇaṃ ye ca durgāṇy atitaranti te //23//
ya eṣa rakta-padma-akṣaḥ pīta-vāsā mahā-bhujaḥ /
suhṛd-bhrātā ca mitraṃ ca sambandhī ca tava^acyutaḥ //24//（Mbh XI-III-23cd～24）

「赤い（rakta）、蓮（padma）の眼（akṣa）を持つ」とは、「赤い眦を持つ、蓮の花弁の形状をした眼」のことである。

(21)　ratna-mālya-ambara-dharaḥとあるものの、GPE版によってrakta-mālya-ambara-

dharaḥとの読みを採用する。

(22)　本稿はインドの古典作品に現れる「蓮」に関連した譬喩語を扱う一連の論攷の序章と言うべきものである。特に「眼の色」の問題、およびその譬喩に用いられる「蓮の種類」との関連性の問題を含めて、稿を改めて論じたい。

(23)　Rāmāyaṇa中に現れる主立った語形はほぼ網羅していると考えるが、女性語尾では採っていない。